

長編推理小説

つぶやく骨…

秋吉台殺人事件

BONES WHISPERING THE TRUTH

田中光二

KOBUNSHA



光文社文庫

長編推理小説

つぶやく^{ほね}骨… 秋吉台殺人事件^{あきよしだいきつじん じけん}

著者 田中光二^{た なか こう じ}

2005年1月20日 初版1刷発行

発行者 篠原睦子
印刷 堀内印刷
製本 フォーネット社

発行所 株式会社 光文社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 (03)5395-8149 編集部

8114 販売部

8125 業務部

振替 00160-3-115347

© Kōji Tanaka 2005

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-334-73817-6 Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

光文社文庫

長編推理小説

つぶやく骨…

秋吉台殺人事件

田中光二

第一部 千々岩、西へ走る 7

第一章 中也と山頭火 8

第二章 長州人・門馬警部 25

第三章 大洞窟 44

第四章 萩を歩く 67

第二部 白骨は訴える 75

第一章 その名も地獄穴 76

第二章 死肉を喰う虫 89

第三章 内臓ビジネス 108

第四章 青竜会との対決 129

『つぶやく骨…秋吉台殺人事件』 目次

第三部 いざ行かん地獄の底へ 151

第一章 千々岩、罨をかける 152

第二章 深夜の大捕物 170

第三章 合田逃走す 182

第四章 殺し屋もまた死す 194

第五章 ひやうぼ 百畝の挑戦 214

第六章 妄執の果て 240

解説 小日向 悠 260

第一部 千々岩、西へ走る

第一章 中也と山頭火

1

ゴールデンウィークの終わったあとの中国自動車道は空いていた。

千々岩^{ちぢいわみだれ}乱と嫁の雪子は愛車のコロナ・マークIIでゆったりとその中国道を巡航していた。ハンドルはいつものとおり雪子が握っている。千々岩は助手席のシートを倒し、うつらうつらしていた。

千々岩のマークIIはワンモデルまえの車で、走行距離はもう一〇万キロちかい。できれば買い替えたいところだし、出入りのセールスマンもうるさくいつてくるのだが、車もここまですると愛着が出てくる。

まだまだよく走るし当分買い替えるつもりはない。第一、自由になるカネがないし、この歳でローンを背負い込むのもいやなのである。

もともと千々岩は現金主義。ローンはなるべく使わない主義である。刑事として、カネにからむ人間の暗黒面をたくさんみてきたことがそうさせるのだろう。

いまは超低金利時代なのだから、借りられるものなら借りたほうが得なのだが、そういう考えは頭からないのである。

このところ妙にいそがしく……各県警からいろいろ事件のアドバイスを頼まれ、それがようやく一段落して、ひさしぶりのドライブ旅行だった。

こんどは思い切って中国地方まで出掛けることにした。

関東甲信越、東北は比較的よく回っているが、西の方は大阪、紀伊半島どまりなのである。中国地方をゆつくり訪ねるのは初めてといってよかった。

現役のデカ時代に出張で広島や博多まで出張ったことはあるが、それはべつだ。

今回のおもな目的は、萩を中心とする長門地方ながとを回ることである。まず山口の湯田温泉で一泊する。これは県警に表敬訪問しなくてはならないためもある。旧交をあたためたい人物もいて、すでに連絡をとってあった。

そのあと日本海に回り青海島おうみしままで足を延ばしてから萩に回り、秋吉台あきよしだいをみてから西長門温泉で一泊するつもりだった。

帰りは、できれば奥津温泉おくつにも寄るつもりだ。藤原審爾の名作『秋津温泉』のモデルになった温泉である。山奥のひなびたい温泉だそうだ。

そういうわけで、千々岩の旅行というのは、名所巡りというよりも、温泉巡りなのである。さすがに長門までは東京から一日ではいけない。ゆうべは神戸のホテルに一泊した。そして山陽道から中国道に入り直したのである。

中国道はもともとあまり交通量の多くない道路である。日本中に高速道が整備されつつあるが、単体でみて黒字なのは数えるほどしかないそうである。

とくに問題なのは、本州と四国とのあいだに三本も架けられた本四架橋である。

だれが考えても三本は多いから、政治的な思惑の所産だということははっきりしている。建設費が膨大なので当然通行料も高くなる。そのため利用者がすくなくなるという悪循環を生む。

いまや道路公団のお荷物になっているというのだが、最初からわかりきっていたことではないのか。

しかしこれにもこりず、紀淡海峡に橋を架ける計画まで浮上しているというのだから、あいたくちがふさがらない。

地方に高速道がどうしても必要というのであれば、やはり企業母体を民営化して、採算がとれるよう工夫すべきだろう。

それはともかく中国道は山間地をつらぬいているので景色はいい。適当にカーブが連続して運転しているほうも飽きないはずだ。

季節は五月。かなたにみえる山々は青々とし点々とツツジやフジに彩られている。のどかな山里の光景が連続している。

千々岩はそんな光景をつらつら眺めているうちに眠くなり、つい目を閉じてしまったのだ。だいたい、高速道で助手席に座っているというのは眠くなるものである。

ドライバーもつられて眠くなるのでいやがるものだが、雪子は根っからの運転好きだから平気だ。好きなブリトニー・スピアーズのCDを大音響で鳴らしながら運転している。

千々岩はそのなかでも眠れるというのは、長年のあいだに慣らされたのだ。

2

ふっと目覚めた。

「いまどのへんだね？」

「津山インターをすぎたところですわ」

「津山か……」

千々岩はため息をついた。

「例の三十人殺しのあったところだな」

「横溝正史の『八つ墓村』^{はなむら}のモデルになった事件ですわね」

さすがに雪子はもと婦人警官（刑事）だけあってよく知っている。

津山の三十人殺しは太平洋戦争直前に起きたもので、そのためあまり騒がれなかったのだが、一件の大量殺人事件としての三十人という犠牲者数は、いまだにそのレコードが破られていない。

一九三八年五月二十一日夜。津山に近い苦田^{とまた}郡西加茂村で、都井睦雄という青年が、黒詰め襟の服にゲートルを巻き、地下足袋をはき頭には二本の懐中電灯をくくりつけ、腰には自転車用ランプをぶらさげるといいうでたちで、日本刀一振り合口^{あいくち}二本を腰に差し、手には十二番九連発の猟銃をもち、家を出た。

隣家を手初めとして、銃声におどろいて飛び出して来た村人を片端から殺戮し始めたのである。

都井は十八歳のときに肋膜炎をわずらい徴兵検査に不合格となった。学校にも行かず家でぶらぶらしていた。

当時の世相では徴兵検査に不合格というのはいへんな不名誉である。村中の人間に笑われ軽蔑されているという被害妄想にとりつかれた。

病氣は結核に進み不治の病とさった都井は自殺を覚悟したが、ふだんから自分を嘲笑っている村人たちをひとりでも多く道連れにして死のうと思いいったのである。

戸数二十三戸、人口わずか百十一人の村は恐怖にたたき込まれた。二本の懐中電灯を光ら

せて走り回る都井の姿はまるで鬼のようにみえたという。

けつきよく一時間半に及ぶ凶行で三十人の村人が銃殺ないし刺殺された。

都井は山林に逃げ込んだあと、動機をしろす遺書を書いて自殺した。

推理作家の横溝正史はこの事件にヒントを得て、「八つ墓村」を書いている。

小説としてではなくドキュメンタリーとして書いている作家たちもいる。

ふしぎなことに……というよりもさいわいなことに、日本では大量殺人や連続殺人の記録がすくない。

とくにアメリカ型のいわゆる快楽殺人のヤマがすくないのである。

アメリカには、みずからの快楽のために何十人と殺した犯人がごまんといる。

つまり倒錯した性的快楽だ。他人に苦痛を与えることなしに性的快楽を得られない人間というものがいて、モラルの歯止めが利かないと人を殺す。

社会的な規範が身につかず、生まれつき感情に乏しく他人にたいする感情移入の能力が欠けている、いわゆるサイコパスである（ソシオパスともいう）。

しかもアングロサクソンの白人に限られているということが興味深い。黒人やヒスパニック、あるいはオリエンタルの大量・連続殺人者というのはめったにいない。

この典型は、三十六人の若い女性を殺したとされるテッド・バンディだろう。犠牲者の数はもつと多い可能性もある。バンディは死刑と決まったが、まだ未解決の事件があるとほの

めかし、その死体のありかを教えるからといって刑の引き伸ばしをはかったからだ。

しかしそのかいもなく、一九八九年一月二十四日、電気椅子によって処刑された。

全米の若いブロンドの女子学生たちはほっとした。バンディが好んでねらったのはこのタイプの女性だったからである。

しかし日本でもじわじわと快樂殺人者がふえつつある。しかも年少の殺人者がふえているのが問題だ。

日本はアメリカのあとを十年遅れて追っているとかつていわれたが、こんなことまでまねするのはたまらない。

いや、冗談はともかく、千々岩が本気で気にかけているのは、日本においても、個人と社会とのつながりかたがどこか壊れ始めているということである。

むかしの日本は儒教の影響もあつて濃密な縦型社会であり、道徳規範は上から下、つまり親や教師あるいは社会的伝統という流れによつて若者たちの頭にスムーズにしみこんでいた。いい意味で教条的だったわけである。

しかし戦後民主主義社会となつて、なにかが変わつた。権利ばかりが叫ばれ義務や規範はなおざりにされた。

社会の縦のつながりがなく、個人がバラバラになる横型Ⅱ悪平等社会になつてしまったのである。個人の権利が優先されるアメリカ型社会がその典型である。

これは欲望の放恣な解放につながる。

その意味では日本もまさにアメリカのあとを追っているといっている。

これと対決せざるをえない警察にとつてはゆゆしい事態だが、幸か不幸か、千々岩は現役を外れてしまった。

だが気になっていることはたしかなのである。

3

中国道は長い。

マークIIが入った神戸三宮インターから山口インターまではほぼ四〇〇キロもある。

さしもの運転ずきの雪子も一気に走るのはつらい。

途中、昼食とコーヒータムで二度休憩して、山口インターから降りたのは四時近かった。まあちようどいい時間だ。

宿は、湯田温泉の山水荘というホテルをとつてある。雪子がインターネットで調べて予約したのだ。一泊ひとり一万五千円と、大きな旅館にしてはリーズナブルな料金だ。

いまはホテルや旅館はインターネットにダンピングした値段を表示してあるので、それを調べて予約するのがかしこいらしい。